

招待席

森 鷗外

もり おうがい 小説家 1862.2.17(旧 1.19) - 1922.7.9
現島根県津和野市に生まれる。本名森林太郎。 陸軍軍
医総監・帝室博物館総長・従二位。 掲載の翻訳は明治
四十五年(1912)一月「帝国文学」初出。(訳者雅号の一字「鷗」
は正しくないが、現在の機械環境では正しく受信されない場合があり、極め
て遺憾ながら別字にしたがっている。かかる事情の速やかな是正が望まれる。
同様の例が他に二三生じている。)

冬の王 HANS LAND 原作

このデネマルクといふ国は実に美しい。言語には晴々しい北国の音響があつて、異様に聞える。人種も異様である。驚く程純血で、髪の毛は苧(を)のやうな色か、又は黄金色に光り、肌は雪のやうに白く、体は鞭(むち)のやうにすらりとしてゐる。それに海近く棲(す)んでゐる人種の常で、秘密らしく大きく開いた、妙に赫(かゞや)く目をしてゐる。

己(おれ)はこの国の海岸を愛する。夢を見てゐるやうに美しい、ハムレット太子の故郷、ヘルジンギョオルから、スエデンの海岸迄、さつぱりした、住心地(すみごゝち)の好ささうな田舎家(みなかや)が、帯の様に続いてゐて、それが田畑の緑に埋もれて、夢を見る様に、海に覗(のぞ)いてゐる。雨を催してゐる日の空気は、舟からこの海岸を手の届くやうに近く見せるのである。

我々は北国の関門に立つてゐるのである。なぜといふに、ここを越せばスカンヂナキアの南の果である。そこから偉大な半島がノルエエゲンの瀕(みぎは)や岩のある所まで延びてゐる。

あそこにイプセンの墓がある。あそこにアイスフォオゲルの家がある。どこかあの辺で、北極探険者アンドレエの骨が曝(さら)されてゐる。あそこで地極の夜が人を威(おど)してゐる。あそこで大きな白熊がうろ付き、ペンギン鳥が尻を据ゑて坐り、光つて漂ひ歩く氷の宮殿のあたりに、昔話にありさうな海象が群がつてゐる。あそこに又昔話の磁石(じしやく)の山が、舟の釘を吸ひ寄せると、探険家の心を始終引き付けてゐる地極の秘密が眠つてゐる。我々

は北極の鬨(しきゐ)の上に立つて、地極といふものの衝(つ)く息を顔に受けてゐる。

この土地では夜も、戸を締めない。乞食もゐなければ、盗賊もゐないからである。斜面をなしてゐる海辺の地の上に、神の平和のやうなものが広がつてゐる。何もかも故郷のドイツなどとは違ふ。更(ふ)けても暗くはならない、此頃の六月の夜の薄明りの、褪(さ)めたやうな色の光線にも、又翌日の朝焼けまで微(かす)かに光り止まない、空想的な、不思議に優しい調子の、薄色の夕日の景色にも、又暴風(あらし)の来さうな、薄黒い空の下で、銀鼠色に光つてゐる海にも、又海岸に棲(す)んでゐる人民の異様な目にも、どの中にも一種の秘密がある。遠い北国の謎がある。静かな夏の日、北風が持つて来る、あちらの地極世界の沈黙と憂鬱とがある。

己(おれ)は静かな所で為事(しごと)をしようと思つて、この海岸の或る部落の、小さい下宿に住み込んだ。青々とした蔓草(つるくさ)の巻き付いてゐる、その家に越して来た当座の、或る日の午前であつた。己の部屋の窓を叩(た)いたものがある。

「誰か」と云つて、その這入(はひ)つた男を見て、己は目を大きくみはつた。

背の高い、立派な男である。この土地で奴僕(ぬぼく)の締める浅葱(あさぎ)の前掛を締めてゐる。男は響の好い、節奏のはつきりしたデネマルク語で、若し靴が一足(そく)間違つてはゐないかと問うた。

果して己は間違つた靴を一足受け取つてゐた。男は自分の過(あやまち)を謝した。

その時己は此男の名を問うたが、なぜそんな事をしたのだから分らない。多分体格の立派なのと、頃(うなじ)を反(そら)せて、傲然(がうぜん)としてゐるのとの為めであつたらう。

「エルリングです」と答へて、軽く会釈(ゑしやく)して、男は出て行つた。

エルリングといふのは古い、立派な、北国の王の名である。それを靴を磨く男が名告(なの)つてゐる。ドイツにもフリードリヒといふ奴僕はゐる。併しまさかアルミニウスといふ名は付けない。この土地はおさんにインゲボルクがゐたり、小間使にエツダがゐたりする。それがさういふ立派な名を汚すわけでもない。

己はいつまでもエルリングの事を忘れる事が出来なかつた。あの男のどこが、こんなに己の注意を惹(ひ)いたのだから、己の部屋に這入つてゐた時間が余り短かつたので、なんとも判断しにくい。目は青くて、妙な表情をしてゐた。なんでもずつと遠くにある物を見てゐるかと思ふ様に、空を見てゐた。悲しげな目といふでもない。真面目な、ごく真面目な目で、譬(たと)へば最も静かな、最も神聖な最も世と懸隔してゐる寂しさのやうだとも云ひたい目であつた。さ

うだ。あの男は不思議に寂しげな目をしてゐた。

下宿の女主人は、上品な老処女である。朝食に出た時、そのをばさんにエルリングはどこのものかといふ事を問うた。

「ラアランドのものでございます。どなたでもあの男を見ると不思議がつてお聞きになりますよ。本当にあのエルリングは変つた男です。」かう云ひさして、大層意味ありげに詞(ことば)を切つて、外の事を話し出した。なんだかエルリングの事は、食卓なんぞで、笑談(ぜうだん)半分には話されないとも思ふらしく見えた。

食事が済んだ時、それまで公爵夫人でもあるやうに、一座の首席を占めてゐたをばさんが、只エルリングはもう二十五年ばかりも此家にあるのだといふだけの事を話した。ひどく尊敬してゐるらしい口調で話して、その外の事は言はずにしまつた。丁度親友の内情を人に打ち明けたくないのと、同じやうな関係らしく見えた。

そこで己は外の方角から、エルリングの事を探知しようとした。

己はその後中庭や畠で、エルリングが色々の為事(しごと)をするのを見た。薪を割つてゐる事もある。花壇を掘り返してゐる事もある。桜ん坊を摘んでゐる事もある。一山(ひとやま)もある、濡れた洗濯物を車に積んで干場へ運んで行く事もある。何羽あるか知れない程の鶏の世話をしてゐる事もある。古びた自転車に乗つて、郵便局から郵便物を受け取つて帰る事もある。

エルリングの体は筋肉が善く発達してゐる。その幅の広い両肩の上には、哲学者のやうな頭が乗つてゐる。たつぷりある、半明色の髪に少し白髪が交つて、波を打つて、立派な額を囲んでゐる。鼻は立派で、大きくて、しかも優しく、鼻梁(はなばしら)が軽く鷲(わし)の嘴(くちばし)のやうに中隆(なかだか)に曲つてゐる。髭(ひげ)は無い。口は唇が狭く、渋い表情をしてゐるが、それでも冷酷なやうには見えない。齒は白く光つてゐる。

己の鑑定では五十歳位に見える。

下宿には大きい庭があつて、それがすぐに海に接してゐる。カッテガットの波が岸を打つてゐる。そこを散歩して、己は小さい丘の上に、縦(もみ)の木で囲まれた低い小屋のあるのを発見した。木立が、何か秘密を掩(おほ)ひ蔽(かく)すやうな工合に小屋に迫つてゐる。木の枝を押し分けると、赤い窓帷(カアテン)を掛けた窓硝子(まどガラス)が見える。

家の棟に烏が一羽止まつてゐる。馴らしてあるものと見えて、その炭のやうな目で己をぢつと見てゐる。低い戸の側に、沢(つや)の好い、黒い大きい、猫が蹲(うづくま)つて、日向(ひなた)を見詰めてゐて、己が側へ寄つても知らぬ顔をしてゐる。

そこへ弦(つる)のある籐(と)の籠にあかすぐりの実を入れて手に持つた女中

が通り掛かつたので、それに此家は誰が住まつてゐるのだと問うた。

「エルリングさんの内です」と、女中が云つた。さも尊敬してゐるらしい調子であつた。

エルリングに出逢つて、話を為掛(しか)けた事は度々あつたが、いつも何か邪魔が出来て会話を中止しなくてはならなかつた。

或晩波の荒れてゐる海の上に、ちぎれちぎれの雲が横(よこた)はつてゐて、その背後に日が沈み掛かつてゐた。如何(いか)にも壮大な、ベエトホオフェンの音楽のやうな景色である。それを見ようと思つて、己は海水浴場に行く狭い道へ出掛けた。ふと槌(つち)の音が聞えた。その方を見ると、浴客が海へ下りて行く階段を、エルリングが修覆してゐる。

己が会釈(ゑしやく)すると、エルリングは鳥打帽の庇に手を掛けたが、直ぐその儘(まゝ)為事(しごと)を続けてゐる。暫く立つて見てゐる内に、階段は立派に直つた。

「お前さんも海水浴をするかね」と、己が問うた。

「ええ。毎晩いたします。」

「泳げるかね。」

「大好きです。」

なぜ夜海水浴をするのか問はうかと思つたが止めた。多分昼間は隙(ひま)がないのだらう。

「冬になるとお前さんどこへ行くかね。コッペンハアゲンだらうね。」

「いゝえ。ここにゐます。」

「ここにゐるのだつて。この別荘造りの下宿にかね。」

「ええ。」

「お前さんの外にも、冬になつてあの家にゐる人があるかね。」

「わたくしの外には誰もゐません。」

己はぞつとしてエルリングの顔を見た。「たまるまいぢやないか。冬寒くなつてから、こんな所にたつた一人であつては。」

エルリングは、俯向(うつむ)いた儘で長い螺釘(ねぢくぎ)を調べるやうに見てゐたが、中音で云つた。

「冬は中々好うございます。」

己はその顔を見詰めて、首を振つた。そして分疏(いひわけ)のやうに、かう云つた。「余計な事を聞くやうだが、わたしは小説を書くものだからね。」

この時相手は初めて顔を上げた。「小説家でお出(いで)なされるのですか。デネマルクの詩人は多くこの土地へ見えますよ。」

「小説なんと云ふものを読むかね。」

エルリングは頭を振つた。「冬になると、随分本を読みます。だが小説は読

みません。若い時は読みました。さうですね、マリイ・グルッペなんぞは、今も折々出して見ますよ。ヤアコップセンは好きですからね。どうも此頃の人の書くものは。」手で拒絶するやうな振をした。

己は自分の事を末流だと諦(あきら)めてはゐるが、それでも少し侮辱せられたやうな気がした。そこで会釈(ゑしやく)をして、その場を退(の)いた。

夕食の時、己がをばさんに、あのエルリングのやうな男を、冬の七ヶ月間、こんな寂しい家に置くのは、残酷ではないかと云つて見た。

をばさんは意味ありげな微笑をした。そして云ふには、ことしの五月一日に、エルリングは町に手紙をよこして、もう別荘の面白い季節が過ぎてしまつて、そろそろお前さんや、避暑客の群が来られるだらうと思ふと、ぞつとすると云つたと云ふのである。

「して見ると、あなたの御贖(ごひいき)のエルリングは、余りお世辞はないと見えますね。」

「それはさうでございます。お世辞なんぞはございません。」かう云つてをばさんは笑つた。

己には此男が段々面白くなつて来た。

その晩十時過ぎに、もう内中(うちぢゆう)のものが寐(ね)てしまつてから、己は物案(ものあん)じをしながら、薄暗(うすく)い庭を歩いて、風(な)いだ海の鈍(に)い波の音を、ぼんやりして聞いてゐた。その時己の目に明(あか)りが見えた。それはエルリングの家から射(や)してゐたのである。

己は直ぐにその明(あか)りを辿(た)つて、家の戸口に行つて、少し動悸(どうき)をさせながら、戸を叩(たた)いた。

内からは「どうぞ」と、落ち着いた声で答へた。

己は戸を開けたが、意外の感に打たれて、鬨(しきゐ)の上に足を留めた。

ランプの点(つ)けてある古卓(ふるづくゑ)に、エルリングはいつもの為事衣(しごとぎ)を着て、凭(よ)り掛かつてゐる。只前掛だけはしてゐない。何か書き物をしてゐるのである。書いてゐる紙は大判である。その側には、厚い書物が開けてある。卓の上のインク壺の背後には、例の大きい黒猫が蹲(うづくま)つて眠つてゐる。エルリングが肩の上には、例の烏が止まつて今己が出し抜(ぬ)けに来た詫(わび)を云ふのを、真面目な顔附で聞いてゐたが、エルリングが座を起(た)つたので、烏は部屋の隅へ飛んで行つた。

エルリングは椅子を出して己を掛けさせた。己はちよいと横目で、書棚にある書物の背皮を見た。グルンドヱグ、キルケガアルド、ヤアコップ・ビョオメ、アンゲルス・シレジウス、それからギョオテのファウストなどがある。後に言つた三つの書物は、背革の文字で見ると、ドイツの原書である。エルリングはドイツを読むと見える。書物の選択から推して見ると、此男は宗教哲学のやう

なものを研究してゐるらしい。

大きな望遠鏡が、高い台に据ゑて、海の方へ向けてある。後に聞けば、その凸面鏡は、エルリングが自分で磨(す)つたのである。書棚の上には、地球儀が一つ置いてある。卓の上には分析に使ふ硝子瓶がある。六分儀がある。古い顕微鏡がある。自然学の趣味もあるといふ事が分かる。家具は、部屋の隅に煖炉が一つ据ゑてあつて、その側に寝台があるばかりである。

「心持の好きさうな住まひだね。」

「ええ。」

「冬になつてからは、誰が煮炊(にたき)をするのだね。」

「わたしが自分で遣ります。」かう云つて、エルリングは左の方を指さした。そこは龕(がん)のやうに出張つてゐて、その中に竈(かまど)や鍋釜(なべかま)が置いてあつた。

「此土地の冬が好きだと云つたつけね。」

「大好きです。」

「冬の間誰か尋ねて来るかね。」

「あの男だけです。」エルリングが指さしをする方を見ると、祭服を着けた司祭の肖像が卓の上に懸かつてゐる。それより外には扁額(へんがく)のやうなものは一つも懸けてないらしかつた。「あれが友達です。ホオルンベエクと云ふ隣村の牧師です。やはりわたしと同じやうに無妻で暮してゐます。それから余り附合をしないことも同様です。年越の晩には、極まつて来ますが、その外の晩にも、冬になるとちよいちよい来て一しよにトツヂイを飲んで話して行きます。」

「冬になつたら、此辺は早く暗くなるだらうね。」

「三時半位です。」

「早く寝るかね。」

「いゝえ。随分長く起きてゐます。」こんな問答をしてゐるうちに、エルリングは時計を見上げた。「御免なさい。丁度夜なかです。わたしはこれから海水浴を遣(や)るのです。」

己は主人と一しよに立ち上がった。そして出口の方へ行かうとして、ふと壁を見ると、今迄気が附かなかつたが、あつさりした額縁(がくぶち)に嵌(は)めたものが今一つ懸けてあつた。それに荊(いばら)の輪飾がしてある。薄暗いので、念を入れて額縁の中を覗くと、肖像や画ではなくて、手紙か何かのやうな、書いた物である。己は足を留めて、少し立ち入つたやうで悪いかとも思つたが、決心して聞いて見た。

「あれはなんだね。」

「判決文です。」エルリングはかう云つて、目を大きくみはつて、落ち着いた

気色で己を見た。

「誰の。」

「わたくしのです。」

「どう云ふ文句かね。」

「殺人犯で、懲役五箇年です。」緩(ゆる)やかな、力の這入(はひ)つた詞(ことば)で、真面目な、憂愁(いうしう)を帯びた目を、怯(おそ)れ気(げ)もなく、大きくみはつて、己を見ながら、かう云つた。

「その刑期を済ましたのかね。」

「ええ。わたくしの約束した女房を付け廻してゐた船乗でした。」

「そのお上(かみ)さんになる筈の女はどうなつたかね。」

エルリングは異様な手付きをして窓を指さした。その背後(うしろ)は海である。「行つてしまつたのです。移住したのです。行方不明です。」

「それは余程前の事かね。」

「さやう。もう三十年程になります。」

エルリングは昂然(かうぜん)として戸口を出て行くので、己も附いて出た。戸の外で己は握手して覚えず丁寧(ていねい)に礼をした。

暫くしてから海面の薄明りの中で己はエルリングの頭が浮び出て又沈んだのを見た。海水は鈍い銀色の光を放つてゐる。

己は歸つて寝たが、夜どほしエルリングが事を思つてゐた。その犯罪、その生涯の事を思つたのである。

丁度浮木が波に弄(もてあそ)ばれて漂ひ寄るやうに、あの男はいつか此僻遠(へきゑん)の境に来て、漁師をしたか、農夫をしたか知らぬが、或る事に出会つて、それから沈思する、冥想(めいさう)する、思想の上で何物をか求めて、一人でゐると云ふことを覚えたものと見える。その苦痛が、さう云ふ運命にあの男を陥(おと)入れたのであらう。そこでかうして、此別荘の冬の王になつてゐる。併し毎年春が来て、あの男の頭上の冠を奪ふと、あの男は浅葱(あさぎ)の前掛をして、人の靴を磨くのである。夏の生活は短い。明るい色の衣裳や、麦藁帽子(むぎわらぼうし)や、笑声や、噂話(うはさばなし)はたちまちの間に閃(ひらめ)き去つて、夢の如くに消え失せる。秋の風が立つと、燕や、蝶や、散つた花や、落ちた葉と一しよに、そんな生活は吹きまくられてしまふ。そして別荘の窓を、外から冬の夜の闇が覗く。人に見棄てられた家と、葉の落ち尽した木立のある、広い庭とへ、沈黙(しんもく)が抜足をして尋ねて来る。その時エルリングは又昂然(かうぜん)として頭を挙げて、あの小家の中の卓(よ)につてゐるのであらう。その肩の上には鴉(からす)が止まつてゐる。この北国神話の中の神の様な人物は、宇宙の問題に思(おもひ)を潜(ひそ)めてゐる。それでも稀には、あの荊(いばら)の輪飾(りんごし)の下の扁額(へんがく)に目を注ぐことがあるだらう。そしてあの世棄人(よすて

びと)も、遠い、微(かす)かな夢のやうに、人世とか、喜怒哀楽とか、得喪利害とか云ふものを思ひ浮べるだらう。併しそれはあの男の為めには、疾(と)くに一切折伏(しやくぶく)し去つた物に過ぎぬ。

暴風が起つて、海が荒れて、波濤(はたう)があの家を撃ち、庭の木々が軋(きし)めく時、沖を過ぎる舟の中の、心細い舟人は、エルリングが家の窓から洩れる、小さい燈の光を慕はしく思つて見て通ることであらう。

(明治四十五年一月)